

古楽の演奏について

現代の楽器は大きなホールで、どんな時代のどんなタイプの音楽でも演奏できるように、よりパワフルかつ要求される表現上の多様性に対応できるように種々改良され、機能の向上が図られてきた。その結果、演奏技巧の向上とともに、大きく、力強く、輝やかしく豊潤な音が得られるようになった。反面、かつての時代にもっていた手作りの素朴さや人間的な息づかいからは次第に遠ざかり、均一・画一的になっていった側面もあることは否定できない。

一方、古楽演奏における歴史的楽器の世界では、楽器そのものとともに、当時の奏法や演奏習慣の研究がなされ、楽器の適正な復元や高い水準のコピーが製作されるようになり、楽器の特徴を生かす演奏技術も向上してきた。

それに伴い、歴史的楽器の音は、大きくはないが素朴で暖かく、力強くはないが華麗で明晰で表現性に富んでおり、また、ひとつひとつの音の鳴り方の微妙な違いゆえに、豊かな陰影が引き出されることにより、現代の楽器や演奏技術では得られない音楽的要素を浮き彫りにすることができるようになってきた。

響きは音楽のひとつの素材であり、作品のイメージは素材の持つ質感と不可分である。さらにいえば作曲家が考えた演奏の方法や様式は、楽器の響きや演奏家の手腕も含めて、音楽全体の枠組みと一体的不可分な関係にある。

ダウランドやヴァイスにはリュートの素朴で豊かな倍音を持つ響きが、バッハやクーペランにはハープシコードの繊細な響きが、モーツァルトやシューベルトにはフォルテピアノの明快な響きが、そしてソルやジュリアーニにはロマンチックギターの軽やかな響きがぴったりなように、作曲家がその作品を作る際、念頭においていた楽器及び奏法を用いることにより、作品が本来持っている音楽的特質を最もふさわしい形で引き出すことができる。

しかし、歴史的な楽器を使えばそれだけで歴史的に正しく音楽的な演奏が保証されるわけではなく、歴史的楽器の方が昔の作曲家たちが思い描いた音により近い響きが得られるということに過ぎない。響きそのものとともに当時の演奏慣習も重要な要素であるが、それも直接継承されているわけではない。

また、現代人である私たちは当時の人々が想像もできなかった様々な種類の音楽を経験しており、生活様式も価値観も違う。私たちの精神や感受性、音楽感は過去の人々のそれと同じではない。従って、たとえ当時の音楽を技術上完璧に復元したとしても、当時の人々が感じたと全く同じにわれわれが感じるということは有りえない。

現在、我々に残されているのは音楽の実体ではなく、楽譜という形で音楽の素材の一部が示されているに過ぎない。完全ではないということは、すなわち、一枚の楽譜には限りなく多様な音楽演奏の可能性が内在しているということである。

当時は、どの指で弾いても均等で大きな音が出るようにとの指向はなかったものと考えられ、一音一音の要求する音のイメージや息遣い、アーティキュレーションがあり、それに相応しい指、奏法を用いて、楽器特有の限界の中で楽器の特性を生かしながら個性豊かに紡ぎ出すといった感じの奏法だったであろうと推測される。

また当時は、作品はひとつの素材として存在し、実際の演奏時には、その都度、常に新しいアイデア、ひらめきとともに、生き生きと表情豊かな音楽を聴く者に提供していたのではないだろうか。決して、同じ曲を何度も同じような弾き方で再現されることを想定してはいなかったのではないか。

演奏者は多様な可能性の中から、歴史的な洞察、推測、想像力に基づく独自の解釈過程を経て、自らの美学的信念、音楽作りの哲学に照らし、自己主張、創意工夫を重ねて、適切と考える歴史的な文脈の中で一貫した独自の様式を作り上げ、それを自分の趣味、その時々気分に従って、生き生きと表現する。